

小学校高学年のリレー授業におけるバトンパスの指導に関する基礎的研究 －「滑らかなバトンの受渡し」の習得に向けた実践を通して－

A basic study of baton pass instruction in the relay class of an upper-grade elementary school － Practicing the “smooth baton pass” －

陳 洋 明

Yomei CHIN

ABSTRACT

The purpose of this study was to obtain basic knowledge for learning instruction of a “smooth baton pass.” The study took place in a relay class in the upper grades of an elementary school. The participants were 26 (10 boys and 16 girls) 6th grade elementary school children who practiced sprints and relays seven times. A separate course relay was practiced and instruction for a smooth baton pass was given. The children’s baton pass skills were evaluated through observation using a skill evaluation table. Results indicated the following :

1. It is important to host discussions about the baton pass process and team tactics so that the skill of the smooth baton pass can be acquired. The team needs to learn about the requirements of the task in the class, generate ideas to manage the process, and have opportunities to implement their strategy.
2. To improve baton pass skills in the 6th grade elementary school, effective learning instruction should also consider “accelerating the next runner”. Instruction in relay class should focus on topics “baton pass with less deceleration” by showing learners how to use “dash marks” appropriately.

Key words; physical education class, relay, baton pass, learning instruction

1. はじめに

2020年度に全面実施となった小学校学習指導要領では、中学年の走・跳の運動領域、高学年の

陸上運動領域において、新たにリレーの「バトンの受渡し」に関する指導内容が示された。中学年の「かけっこ・リレー」では、「調子よく走ったりバトンの受渡しをしたりすること」¹⁰⁾、高学年

の「短距離走・リレー」では、「一定の距離を全力で走ったり、滑らかなバトンの受渡しをしたりすること」¹⁰⁾と示され、従前の学習指導要領ではみられなかった「バトンの受渡し」に関する内容が新たに明記された。リレータイムの向上には、「バトンの受渡し」(バトンパス)の技能の向上が大きく関わってくることから、児童が「バトンの受渡し」の技能を高めていくリレーの授業実践は、益々重要視されてくるといえよう。また、中学年では例示として「走りながら、タイミングよくバトンの受渡しをすること」¹¹⁾、高学年では「テークオーバーゾーン内で、減速の少ないバトンの受渡しをすること」¹¹⁾と示されていることから、高学年では、中学年に比べて技能の内容が複雑化し、前走者と次走者がバトンをスムーズに渡すための技術的な指導が求められてくると考えられる。

ところで、高学年の陸上運動領域では、「体を巧みに操作しながら、合理的で心地よい動きを身に付けるとともに、仲間と速さや高さ、距離を競い合ったり、自己の課題の解決の仕方や記録への挑戦の仕方を工夫したりする楽しさや喜びを味わうことのできる運動である」¹¹⁾とされていることから、「合理的な動き」の習得を通して、陸上運動系の特性^{注1)}を味わわせることが大切であると考えられる。川本・雉子波⁸⁾は、リレーの学習では、タイムロスのない合理的なバトンパスをすることが、中心的な学習課題となることを指摘している。よって、リレーの特性を味わわせるためにも、合理的なバトンパスの学習指導の在り方について検討する必要があると考えられる。

これまで小学校高学年におけるリレーの授業づくりや学習指導に示唆を与える研究では、池田³⁾や川本・雉子波⁸⁾、尊鉢¹²⁾などの実践研究が挙げられるが、近年では数少なく、主に中学年を対象とした実践研究がみられる^{2) 7)}。よって、小学校高学年を対象としたリレー授業における合理的なバトンパスの指導に向けた実践研究に取り組む必要性があると考えられる。

そこで本研究では、小学校高学年を対象としたリレーの授業実践を通して、児童のバトンパスの技能の習得状況を明確にすることから、技能の内容として示される「滑らかなバトンの受渡し」の学習指導に向けた基礎的な知見を得ることとした。

2. 方 法

1) 期日・対象

大阪府I市立S小学校6年生26名(男子10名・女子16名)を対象とし、2018年6月4日~7月9日の間で、「短距離走・リレー」の授業を計7時間(短距離走:2時間、リレー:5時間)実施した。なお、授業は、過去に陸上競技の跳躍種目の競技歴がある筆者をT1、学級担任である小学校教諭をT2として行った。授業の進行、短距離走・リレーの指導に関しては筆者が、授業のマネジメントと記録測定の補助については、学級担任である小学校教諭が実施した。本研究の目的・方法等については、事前に対象校の校長、学級担任に面及び書面にて説明し、同意を得た。また、対象児童の保護者に対しては、書面にて本研究の概要について説明を行い、同意を得た。

2) 単元指導計画

実施した単元指導計画は、表1に示したとおりである。

1時間目及び2時間目では、短距離走の動きづくりを実施し、短距離走の補助運動、効率的なスタートダッシュの方法や正しいランニングフォーム(姿勢、目線、腕の振り方)を指導した。

3時間目以降は、リレーの学習へ移行し、主に池田³⁾が実践した「セパレートコースリレー」を主教材として実践した。「セパレートコースリレー」は、「走る者同士の接触による順位の変化やタイムロスが少なく、チームの練習成果をはっきり示しやすい」⁴⁾こと、セパレートコースの場づくりにより、「子どもを競技会のような雰囲気浸らせ、リレーへの興味を一層引き出すものとな

表1 単元指導計画

	1時間目	2時間目	3時間目	4時間目	5時間目	6時間目	7時間目	
ねらい	正しいスタートダッシュを身に付けて、素早く走ろう!	正しいランニングフォームを身に付けて、50mを全力で走ろう!	バトンパスのポイントを知り、セバレートコースリレーの目標記録に挑戦しよう!	チームの仲間とバトンパスの仕方やオーダーを工夫して、リレータイムを更新しよう!	スピードに合ったバトンパスを行い、リレータイムをより速くしよう!	チームでバトンパスの行い方や走順を工夫して、リレータイムをより速くしよう!	これまでの学習を生かして、チーム最高のリレータイムを出そう!	
内容	集合・整列・あいさつ・学習内容の確認							
	準備運動：関節の柔軟性を高める動的ストレッチ							
	オリエンテーション ・班編成 ・学習のねらいの確認 ・準備運動 ・補助運動(ジャンケングリコ、変形ダッシュ)	・補助運動(ジャンケングリコ、変形ダッシュ)	・正しいバトンパスの行い方を知る。	・作戦タイム(コースの形状やチームのメンバーの特徴に応じたオーダーの工夫)	・次走者のスタート姿勢のポイントを知る。	・ダッシュマークの活用方法について知る。	・作戦タイム(チームのメンバーの特徴に応じたオーダーの工夫)	・作戦タイム(チームのメンバーの特徴に応じたオーダーの工夫)、バトンパス練習
	・スタートの構え、スタート直後の動き方の練習	・正しいランニングフォームを身に付ける	・各チームでバトンパス練習 ・200m(4×50m)セバレートコースリレー第1回戦目	・各チームでバトンパス練習 ・200m(4×50m)セバレートコースリレー第3回戦目	・各チームでバトンパス練習 ・200m(4×50m)セバレートコースリレー第5回戦目	・各チームでバトンパス練習 ・200m(4×50m)セバレートコースリレー第7回戦目	1チームごと200m(4×50m)セバレートコースリレータイムトライアル	
・正しいランニングフォームを知る。 ・オリンピック選手に挑戦～10秒間走～	・50m走タイム測定	・200m(4×50m)セバレートコースリレー第2回戦目	・作戦タイム(オーダー再編成) ・200m(4×50m)セバレートコースリレー第4回戦目	・作戦タイム(オーダー再編成) ・200m(4×50m)セバレートコースリレー第6回戦目	・作戦タイム(オーダー再編成) ・200m(4×50m)セバレートコースリレー第8回戦目	・作戦タイム(オーダー再編成) ・200m(4×50m)セバレートコースリレー第9回戦目	・作戦タイム(オーダー再編成) ・200m(4×50m)セバレートコースリレー第9回戦目	
学習の振り返り、次時の動機づけ、整理運動、あいさつ							単元のまとめ	

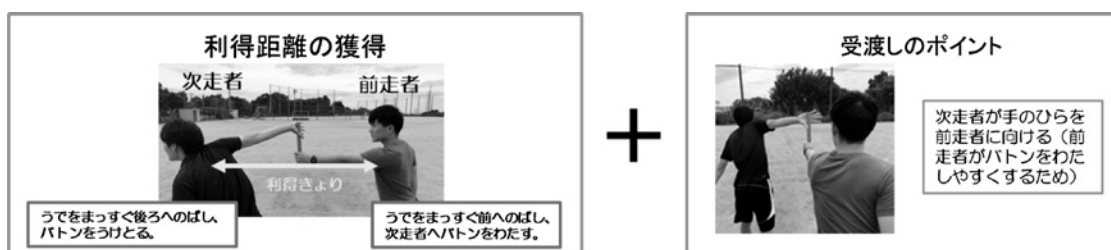


図1 利得距離の獲得に関する指導ポイント

る」⁴⁾ こと2点の価値がある。また、陸上競技における400mリレーの面白さである「最後までどのチームが勝つかわからない」体験ができ、リレーへの関心を高める効果も期待できる。本実践では、200m(4×50m)リレーとし、持ちタイム(各チームにおけるメンバーのフラット走の合計タイム)均等リレーの工夫により、どのチームが勝つかわからない状況を作り出した⁹⁾。本実践では、2時間目の50m走タイムの測定値をもとに、各チームの走力が概ね同等になるよう配慮しながら、計6チームに分けた。単元を通して、作戦タイムの時間を設け、「コースの形状に応じた走順の工夫」や「チームの特徴に応じた走順の工夫」について各チームで話し合いをするように指導した。

本実践における「滑らかなバトンの受渡し」の

習得に向けたバトンパスに関する技術指導については、主に川本・雉子波⁸⁾と尊鉢¹²⁾の先行研究に基づき、「利得距離の確保」および「次走者の加速」に着目した。図1、図2は本実践における「滑らかなバトンの受渡し」の習得に向けた指導ポイントを示したものである。本実践では、3・4時間目において、主に「利得距離の確保」に向けた指導を中心としたバトンパス全般のポイントを指導するとともに、前走者がバトンを押し込む動作が重要であることについても指導した。5・6時間目では、主に「次走者の加速」について指導を行った。「次走者の加速」をより洗練化するために「次走者のスタート姿勢」のポイントや「ダッシュマーク」^{注2)}の活用方法についても併せて指導し、滑らかにバトンを受渡しできるように指

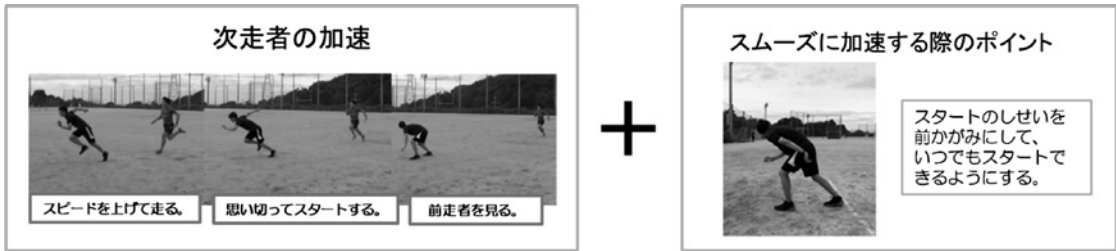


図2 次走者の加速に関する指導ポイント

導した。各時間とも図1、図2に示す内容を十分説明したうえで、各チームに分かれ、話し合いのもと設定したオーダーにてバトンパスの練習に取り組ませた。なお、池田³⁾は、「バトンゾーンを有効に使い、各人の走る距離を工夫しながらスピードにのったりレーをする」ことは、小学校6年生では困難」としていることから、「セパレートコースリレー」を実践した池田³⁾の見解を援用し、本実践では、「テークオーバーゾーン」を設定せずにバトンパスを行わせるようにした。

3) データ収集ならびに分析

① 形成的授業評価法

高橋ほか¹³⁾の形成的授業評価に関する調査用紙を毎時間配付し、児童から回答を得た。回収した調査用紙をもとに「はい」を3点、「どちらでもない」を2点、「いいえ」を1点とし、「成果」、「意欲・関心」、「学び方」、「協力」の4つの次元の平均点を算出した。また、形成的授業評価の診断基準¹³⁾をもとに、4つの次元の評定を算出した。

② 50m走および200m(4×50m)リレーの記録測定

2時間目に短距離走の成果の指標およびリレーのチーム分けに活用するために50m走のタイムを測定した。また、3時間目～7時間目のリレー学習における全6チームの200m(4×50m)リレーの記録を測定した。

③ バトンパスの動作撮影およびバトンパスの技能評価

7時間目に200m(4×50m)リレーのタイムトライアルを実施した際の各区間のバトンパスの映像を撮影した。1走-2走、2走-3走、3走-4走のバトンパスの様子について、デジタルビデオカメラを3台設置しパニング撮影した。

撮影されたバトンパスの映像をもとに、「バトンの受渡し」に関する技能評価表を作成し、対象児童の「バトンの受渡し」の技能に関して評価した。表2は、「バトンの受渡し」に関する技能評価表を示したものである。陳¹⁾が整理した前走者と次走者の技術ポイントを参考に、部分評価では「前走者の腕の伸び」、「前走者のバトンの押し込み動作」、「次走者の加速」、「次走者の腕の伸び」、「次走者の手の位置」について評価した。全体印象評価では、本実践のねらいである「バトンの受渡しの滑らかさ」に加え、「バトンの受渡しのスピード感」についても評価した。評価方法は、それぞれの項目における評価内容ができていれば「○」、できていなければ「×」をつけ、2段階で評価した⁶⁾。評価は陸上競技経験者2名(筆者と短距離走を専門とする大学生)の合議によって実施した。

④ バトンパスの技能に関する意識調査

対象児童がバトンパスの技能を向上させるうえで必要だと考えている要素を抽出するために、単元終了後に「バトンパスを上手く行ううえで大切

表2 「バトンの受渡し」に関する技能評価表

	評価項目	評価内容
部分評価	①前走者の腕の伸び	腕が前方にまっすぐ伸びている。
	②前走者のバトンの押し込み動作	次走者の手のひらに押し込めている。
	③次走者の加速	勢いよく加速している。
	④次走者の腕の伸び	腕が後方にまっすぐ伸びている。
	⑤次走者の手の位置	肩の高さ辺りまで引き上がっている。
全体印象評価	①バトンの受渡しの滑らかさ	スムーズにバトンの受渡しが行われている。
	②バトンの受渡しのスピード感	減速がない状態でのバトンの受渡しが行われている。

表3 形成的授業評価の得点及び評価

次元	平均点(5段階評価)				
	3時間目	4時間目	5時間目	6時間目	7時間目
成果	2.72 (5)	2.69 (5)	2.65 (4)	2.63 (4)	2.47(4)
意欲・関心	2.92 (4)	2.92 (4)	2.87 (4)	2.83 (4)	2.92(4)
学び方	2.81 (5)	2.75 (4)	2.75 (4)	2.79 (4)	2.79(4)
協力	2.83 (4)	2.90 (5)	2.79 (4)	2.77 (4)	2.75(4)
総合評価	2.81 (5)	2.80 (5)	2.75 (4)	2.74 (4)	2.70(4)

なこと」について自由記述にて調査した。

3. 結果及び考察

①形成的授業評価の結果

表3は、リレー学習を行った3時間目～7時間目の形成的授業評価の各次元の平均値および評価を示したものである。

「成果」の次元については、リレー学習序盤の3時間目および4時間目において「5」の評価を得ているが、その後は、「4」の評価へと推移し、数値の落ち込みもみられた。これは、200mリレー(4×50m)のタイムの向上が頭打ちになったことやバトンパスの技能の習得に課題が生じていたことが推察できる。「意欲・関心」の次元については、

「5」の評価は得られなかったものの、単元通して「4」の評価を維持していることから、児童らは、精一杯体を動かしながらリレーの学習を楽しんでいたと考えられる。「学び方」の次元については、急激な数値の変化もなく、単元を通して高い数値を得ていた。本実践では、バトンパスの技術ポイントを明確にし、各チームでバトンパスの練習に取り組む中で、動きの修正を重ね、「滑らかなバトンの受渡し」を目指した。その成果が「学び方」の数値に表われていると考えられる。「協力」の次元については、単元後半にかけて数値の低下がみられるが、「4」以上の評価は得ており、仲間と協働的にリレーの学習に取り組むことができていたと推察できる。

「成果」の次元の数値および評価の低下は課題

であるが、全体的に「4」の評価が多くみられたことから、本実践は児童に概ね受け入れられものであったと考えられる。

②200m (4×50m) リレーにおける記録変化

表4は、3時間目～7時間目における200m (4×50m) リレーのタイム測定による記録推移をチームごとに示したものである。

各チームともにリレーの学習開始時である3時間目のタイムを4時間目以降で更新してはいるが、最高タイムを記録したあとに、タイムの伸び悩みがどのチームもみられたことが明らかになった。

4時間目、5時間目でピークを迎えたチームがほとんどであり、単元を通して記録が伸び悩んだ結果となった。単元後半において取り上げた「次走者の加速」の習得に向けた学習内容を見直す必要があると考えられる。

③「バトンの受渡し」の技能習得の状況について

表5は、「バトンの受渡し」に関する技能評価表を用いて、7時間目に200m (4×50m) リレーのタイムトライアルにおける各区間のバトンパスに関して観察的評価を行い、「○(できている)」、「×(できていない)」の割合を評価項目ごとに示

表4 各チームの200m (4×50mリレー) の記録推移 (秒)

チーム	3時間目	4時間目	5時間目	6時間目	7時間目
A	39.91	<u>37.56</u>	38.01	38.40	39.36
B	38.84	37.84	<u>36.72</u>	37.69	37.38
C	38.62	38.61	38.37	<u>36.57</u>	38.05
D	37.52	<u>36.47</u>	36.77	36.78	37.01
E	38.61	37.85	<u>36.95</u>	37.14	37.93
F	38.00	37.69	<u>37.36</u>	37.40	38.52

※下線部は、最高タイムを表す。

表5 「バトンパスの技能評価表」における各評価項目の習得率 (%)

	評価項目	「○」と判定	「×」と判定
部分評価	①前走者の腕の伸び	77.78	22.22
	②前走者のバトンの押し込み動作	50.00	50.00
	③次走者の加速	50.00	50.00
	④次走者の腕の伸び	88.89	11.11
	⑤次走者の手の位置	61.11	38.89
全体印象評価	①バトンの受渡しの滑らかさ	77.78	22.22
	②バトンの受渡しスピード感	55.56	44.44

したものである。

部分評価における「①前走者の伸び」の項目と「④次走者の腕の伸び」の項目では、「できている」と判定された割合が、それぞれ77.78%、88.89%と高い値を示し、単元を通して「利得距離の確保」に関する技能を習得できていた児童が多いことが明らかになった。全体印象評価における「①バトンの受渡しの滑らかさ」でも「できている」と判定した割合が77.78%であり、単元を通して「滑らかなバトンの受渡し」の技能を身に付けている傾向にあったと考えられる。一方で、「②前走者のバトンの押し込み動作」の項目と「③次走者の加速」の項目では、「できている」、「できていない」の割合がともに50%であり、習得が不十分であったことが明らかになった。前走者のバトンの押し込み動作に関しては、前走者と次走者がタイミングよくバトンの受渡しがなされないと実現が難しく、これには、次走者が加速するためのタイミングが大きく影響すると考えられる。本研究では、第2走者以降の走順を担う児童の個々に応じたダッシュマークを設定するための時間を十分確保することができなかったことから、次走者がスタートを切るタイミングにばらつきが出てしまい、スピードに乗った状態でのバトンパスを実現することができなかったと考えられる。全体印象評価における「②バトンの受渡しのスピード感」でも、「できていない」と判定された割合が半数近くあったことから、本実践では、「次走者の加速」に関する技能の習得に課題が残される結果となった。このことから、バトンの受渡しの際の前走者の合図（「ハイ」）や「ダッシュマーク」の適切な活用方法の指導を重点的に行っていく必要があると考えられる。

④バトンパスの技能に関する意識調査の結果

単元終了後に「バトンパスを上手く行ううえで大切なこと」について自由記述にて調査し児童の記述を整理したところ、「利得距離」、「次走者の加速」、「次走者のバトンパス時の動き」、「前走者

と次走者のタイミング」、「前走者のバトンパス時の動き」、「チームワーク」、「オーダーの工夫」、「その他」のカテゴリーに分類することができた。表6は、それぞれのカテゴリーの記述数および記述内容を示したものである。結果として、「チームワーク」に関する記述が一番多く、次いで「次走者の加速」の記述が多いことから、チーム内で技能の習得に向けた話し合いや作戦タイムを活用すること、次走者が加速してバトンを受け取ることが大切であると児童らは認識していたと考えられる。よって、バトンパスの技能の向上には、チーム内での作戦タイム、スピードに乗った状態でのバトンパスの技能習得に向けたポイントの理解およびチームでの練習時間の確保が必要であるとされる。具体的には、「協力し、走るタイミングやバトンをおわたすときなどチームでよく考えて、それを実行する」ことが大切だと記述している児童もいることから、レース合間やレース終了後にチーム内での各区間のバトンパスの成果を振り返る必要があると考えられる。また、「次走者の加速」の記述内容をみると「ダッシュマーク」の必要性を感じている児童が多数存在することが明らかになった。このことから、小学校高学年でのリレー授業では、「ダッシュマーク」を有効活用したバトンパスの指導を行うことが一層求められてくると考えられる。

4. 小学校高学年のリレー授業におけるバトンパスの指導に向けて

本実践では、「利得距離の確保」に関する技能の習得は概ねできていたと考えられるが、「次走者の加速」に関する技能の定着は不十分であった。その要因として「ダッシュマーク」の設定が個々に応じて指導できなかったことが挙げられる。

小学校学習指導要領解説体育編におけるリレーが苦手な児童への配慮の例として、「仲間同士でスタートマークの位置を確かめたりする」¹¹⁾ことが示されていることも踏まえると、より一層

表6 単元終了段階におけるバトンパスの技能に対する意識調査の結果

				n=26	
カテゴリー	記述内容	記述数	カテゴリー	記述内容	記述数
利得距離	出きるだけ前走者と次走者の利得きよりをつくり	9	前走者のバトンパス時の動き	わたすときに加速すること	5
	手をおもいっきりのぼしてあいてにわたして			あいての人におしだすようにわたす	
	りとくきよりをうまくつかうこと			わたす人は、相手の手をおすように、する	
	うでを(バトンをもってのぼるじょうたいで)ピンとのぼして			しっかりと、相手の手にバトンをわたす。加速させる	
	りとくきよりをうまくつかって			バトンをおわたすギリギリまでうでをふり	
	利得きよりをより多くつくる			バトンをおわたすギリギリまでうでをふり	
	バトンをおわたす時、もう時々うでを手をのぼすのでな(く)りとくきよりになったら手をのぼしてバトンをおわたす			チームワークをきずかないとみんながバラバラになってしまうので、上手にできない	
	利得きよりが大切			なかまを信じること	
	りとくきよりをきをつける			みんなで(チームで)協力して、声かけしたり	
次走者の加速	加速していくこと	12	チームワーク	チームで気合いを入れる	15
	ダッシュマークをかそくしてもらうこと			みんなで協力しあって、バトンパスをすること	
	加速してバトンをおわたす			みんなで協力しあって、バトンパスをすること	
	ダッシュマークの意識を高める			バトンを持っている人をしんじて	
	バトンもろい時にうしろをふりむかすうしろの人をしんじて走る(スピードをゆるめない)。			仲間をしんじて、協力して	
	前をむいてスピードにのって、バトンパスを行うこと			みんなで協力して、こうすればいい、ということを言いあう	
	うけとるときに加速すること			チームワークをよくする	
	スピードをつけることが大切			協力し、走るタイミングやバトンをおわたすときなどチームでよく考えて、それを実行すること	
	ダッシュマークをおぼえて加速しながらバトンパスをする			チームワークがみだれると、おたがいにバトンのやりとりが上手になれないと思います。なのでチームワークを深めて、バトンパスを出来たい	
	ダッシュマークが大切			チームで信賴し合うこと	
	かそく			みんなで協力することが大切	
	スタートダッシュ			仲間と協力することが大切	
次走者のバトンパス時の動き	バトンをしっかり受けとる	3	オーダーの工夫	順番を工夫したりすること	1
	バトンがくる前は、前をむいて		その他	一人一人ががんばること	1
	バトンをおわたす時は、前をむいて				
前走者と次走者のタイミング	自分とあいてのタイミングで受けわたすこと	4			
	「はい！」と声かけし、いきあわせてバトンをおわたすスピードにのってバトンをおわたす				
	「はい！」(バトンがわたせるきよりになった合図)とわたす人に言われたら手を出す				
	相手が近くまで来たと思ったら走り出す				

「ダッシュマーク」を活用したバトンパス指導が重要になってくると考えられる。尊鉢¹²⁾は、「10足長を基準とし、1人1人の反応に合わせて、長くしたり、短くしたりすること、川本・雉子波⁸⁾は、マークの設定に際して50cm単位で調整していくことを提示している。よって、これらの先行研究の知見を生かし、個々に応じた「ダッシュマーク」の設定を促す学習指導を行うことが「減速の少ないバトンの受渡し」を身に付けるうえで重要であると考えられる。しかし、ダッシュマークの設定には、両走者の疾走能力の実態も影響することから、マークの初期設定の方法や具体的なマークの調整方法については、今後さらなる実践を重ねて検討していく必要があると考えられる。また、本研究では技能評価の対象ではなかったが、「次走者の構え(スタート姿勢)」の指導も「次走者の加速」に影響すると考えられる。これについて、川本・雉子波⁸⁾の文献では「スタンディングスタートを用いる」こと、尊鉢¹²⁾の文献では、「自然な形で構える」ことが示されており、統一的な

見解は明らかにされていないといえる。今後は、次走者の加速前の動きづくりがバトンパスにどのような影響を与えるかについても検討していく必要があるだろう。

リレーの授業では、「持ちタイムとリレータイムとの差を取り上げ、持ちタイムよりリレータイムの方が早くなる」³⁾という特性に触れさせることが大切となるが、それを実現するためにも「次走者が加速した状態でバトンを受け渡しする」⁸⁾ための手立てを十分に検討する必要があると考えられる。

5. ま と め

本研究では、小学校高学年を対象としたリレーの授業実践を通して、児童のバトンパスの技能の習得状況を明確にすることから、「滑らかなバトンの受渡し」の学習指導に向けた基礎的な知見を得ることを目的とした。その結果、以下のことが明らかになった。

1. バトンパスの技能を向上させるためには、チーム内での「滑らかなバトンの受渡し」の技能の習得に向けた話し合いや作戦タイムの確保が重要である。リレーのレース間、レース後にチームの課題を発見し、その解決に向けた取り組みを考え、それを実行する過程が重要であると考えられる。
2. 小学校6年生におけるバトンパスの技能の向上には、「次走者の加速」に関わる有効な学習指導を検討していく必要がある。「ダッシュマーク」の適切な活用方法を指導し、「減速の少ないバトンの受渡し」を目指すリレー授業を実践することが一層望ましいと考えられる。

注

- 1) 池田・田原⁵⁾は、陸上運動系の特性として、①個人の目標記録への挑戦（個人的な達成型）、②チーム・グループでの得点（記録などを得点化したもの）への挑戦（集団的な達成型）、③個人間やチーム・グループ間での様々な競争（競争型）という3点を挙げ、「陸上運動系の特性に触れる活動」を理解して授業づくりに取り組むことが重要であるとしている。
- 2) 次走者がスタートを切るタイミングを図るための目印（マーク）の名称は、「ダッシュマーク」¹²⁾ほか「GOマーク」⁸⁾、「スタートマーク」¹¹⁾など文献により様々である。

参考文献

- 1) 陳洋明 (2017) リレーの指導の系統性を問う. 体育科教育, 65 (3) : 20-23.
- 2) 原田卓弥・鈴木貴之・戸花善紀・湯口雅史 (2019)

- 主体性の育成に根ざした体育授業の実践的研究—小学校中学年のリレー学習における場の工夫に着目して—. 鳴門教育大学学校教育研究紀要, (33) : 95-102.
- 3) 池田延行 (1983) リレー・短距離走の適時性に関する研究. 岡山大学教育学部研究収録, (62) : 1-13.
 - 4) 池田延行・富山靖光 (1983) リレー・短距離走均等持ちタイムによる200mセバレットコースリレー. 小学校体育教材研究会, 83編, 小学校体育楽しい体育の教材研究. 日本体育社:東京, pp.180-186.
 - 5) 池田延行・田原淳子 (2013) 小学校での陸上運動指導の体系化に関する研究—特に、指導の考え方や進め方について—. 国士舘大学体育研究所報, 32 : 119-125.
 - 6) 今尾優人・藤田育郎 (2019) バットスイングの技能習得に向けた教材・教具の開発—初心者女子大学生を対象とした基礎的研究—. 信州大学教育学部附属次世代型学び研究開発センター紀要, (18) : 129-138.
 - 7) 岩田靖・高地達也・廣田昂星・竹内隆司 (2017) 小学校体育におけるリレー教材の検討—「2サークル・リレー」の分析—. 長野体育学研究, 23 : 31-39.
 - 8) 川本和久・雉子波秀子 (1997) スプリント動作とGOマークを活用した体育科リレーの授業. 福島大学教育実践研究紀要, (32) : 71-78.
 - 9) 松井直樹 (2005) 児童一人一人が意欲的に取り組む体育授業のあり方—「仲間とともに高め合う楽しさ」を味わわせるリレーの授業づくりを通して—. 平成16年度さいたま市長期研修教員研修報告書.
 - 10) 文部科学省 (2018) 小学校学習指導要領 (平成29年告示). 東洋館出版社:東京.
 - 11) 文部科学省 (2018) 小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説体育編. 東洋館出版社:東京.
 - 12) 尊鉢隆史 (2011) 小学校体育授業におけるリレー競技の指導. 関西国際大学研究紀要, (12) : 57-66.
 - 13) 高橋健夫・長谷川悦示・浦井孝夫 (2003) 体育の授業を形成的に評価する. 高橋健夫編著, 体育の授業を観察評価する. 明和出版:東京, pp.12-15.